

書 評

Rie Nakamura. *A Journey of Ethnicity, In Search of the Cham of Vietnam*, first edition. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2020, xiii + 238 p.

伊藤正子*

本書は、ベトナム・メコンデルタに居住するムスリムのチャムに初めて注目した著作である。多数派民族キンの王朝に滅ぼされたチャンパ王国の故地中南部に住むチャムだけが、末裔として「純粹」で「本物」の文化を受け継いでいるという観点に疑問を呈し、メコンデルタと中南部グループの両者のエスニシティの有り様を対比させ、国家の少数民族政策との相互作用にも触れながら、現代社会におけるかれらの生きざまを描き出した。著者は留学先の米国の大学院で、チャムの難民グループに出会ったが皆ムスリムであった。しかしかれらがフランスから招聘し講演を依頼した高名なチャム研究者は中南部のチャムについて語り、著者は講演内容と友人となったムスリムのチャムが全く異なっていることに気づく。このムスリムのチャムとの出会いが著者にチャムの多様性に気づかせた。評者は、キンの文化人類学者が「メコンデルタのチャムは自分たちの歴史を忘れた人々であり本物ではない」と語るのを聞いたことがあるが、著者はベトナム人研究者の「真正性」言説に抗いつつ、1990年代以来25年以上に

わたりチャム研究に従事してきた。本書はその集大成である。

第1章「チャンパ王国」では、チャンパの誕生からの歴史的な経緯が描かれる。ヒンドゥー教と9世紀から始まったイスラム教の伝播、そして海洋交易による繁栄である。交易港を狙ったキン王朝の南進による領土の侵食が11世紀より始まり、19世紀前半に完全に政治的な独立を失った。またベトナムの国史におけるチャンパの位置づけの問題を、王国の崩壊を例に、ベトナム国家の幾つかの語りから論じている。まず崩壊については触れないか、キン王朝によって崩壊したことをぼかす語り方。階級闘争として説明し、封建制と母権制の下にあったチャンパは遅れていたとして、キンによる併合を正当化するもの、また「友好的な文化交換」「二つの文化の結婚」と描写し、キンによる占領をカモフラージュするものなどである。

第2章は、フィールド調査中に遭遇した数々のトラブルを紹介し、その原因がベトナムの歴史と社会構造に深く根差したものであることを指摘する。たとえば、南ベトナム時代に中部高原の少数民族を中心に結成されていた反政府組織FULROに一部のチャムが参加していたため、チャムが現在でも外国組織から援助を得ているのではという不信感が国家側にある。またメコンデルタに比べて中南部のチャム地域では、行政機関の少数民族関係部署がキン幹部で占められている場合が多く、チャムに対する知識と理解が足りない。こうした事情から地元のキン幹部は外国人のチャム研究に非協力的である。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

第3～4章はフィールド調査の成果で、まず第3章は中南部沿岸、特にニントゥアン省のチャムについて、エスニックアイデンティティが過去のチャンパ王国とのつながりにあると論じる。儀式、チャム文字の書記体系やチャム語・チャム文化の起源の探求、部外者との結婚を避けることなどを通じて、文化的伝統の尊重と保存によりエスニシティを主張してきたという。一方、チャム内部では、流動的な二元論として、男性と女性の領域である ahier と awal の概念により、エスニシティが示される。2つの宗教グループ、同じ硬貨の表と裏にもたえられるバラモンと、土着化したイスラムとされるバニの相互依存性もこの二元論で説明される。第4章で扱うメコンデルタのチャムにとって、チャムであることはムスリムであることと同義である。イスラムに改宗すれば、キンでも華人でもその他少数民族でも誰でもチャムになれる。チャムと結婚しなくても、チャム語ができなくても、イスラムの宗教的慣習を熱心に実践するかどうか、エスニシティを決定し、共同体メンバーとして認められるかどうかのカギとなる。中南部のチャムのエスニシティが家系的に決定され、歴史的なチャンパ王国から継続している感覚をもっているかどうか大切なとは対照的である。しかしムスリムとはいうものの、その共同体内部に入ると、魔術や悪魔祓いを実践するなど非イスラム的な要素があるが、かれらは「宗教と文化・伝統は異なるものである」と説明し、自身をインド系など他のムスリムと差別化している。

第5章ではチャムとベトナム国家との関わりが、エスニシティに与える影響について「文芸」と呼ばれる創作ダンスを例に論じる。国家はチャムを少数民族のひとつとして認定しており、チャムには「チャム族」の定義に沿ったアイデンティティの構築が要請されている。チャンパ王国はベトナムの国史に組み込まれ、その遺跡は国家によって歴史・文化遺産に指定され、チャムは「往古のチャンパの人々」として描かれる。キンの幻想によって創られたチャムの宮廷舞踊はベトナムの民族文化の一部とされ、中南部のチャム自身も一少数民族であることをアピールするため、そのようなエスニックな目印を一部用いている。一方、メコンデルタのチャムは、チャンパの歴史と自分たちを切り離し、イスラム教を軸に自分たちの新しい歴史を構築しているため、ベトナム国家の外側に置かれた存在となった。しかし、チャムとしてのアイデンティティを証明するため、かれらもまた中南部チャムの扇子ダンスの要素を取り入れたりしており、これらは国家が2グループをひとつの少数民族として認定した影響といえる。

第6章では、ドイモイ後、少数民族の置かれた地位に対し抵抗する空間を、チャムが拡大する可能性について論じる。発展途上で、前近代的で、自然にやさしいという伝統的な少数民族のイメージは、たとえば織物の布を使った小物やカテ祭りなど、外国志向のマーケットや観光産業に支持されている。しかし人気が出れば出るほど少数民族自身はその所有者としての地位を失い周縁化され、ドイモイは市場志向で少数民族文化の国家統合

を促進する。この波にうまく乗った2人の画家（ひとりにはチャム、ひとりにはキン）が紹介される。かれらは政府が創り出した少数民族のイメージに適応して創作を行なっているが、中南部のチャムの芸術家、ダン・ナン・トの作品は、チャム自身の芸術的語彙を用い、チャンパの歴史やチャムの伝統の知識がある人々だけにわかるメッセージを埋め込んでいる。かれの作品はチャムが自分たちの文化を取り戻す可能性を感じさせるという。

そして結論では、国家が民族分類を行なうとエスニックな意識を次第に形づくることになると指摘、さらにチャムは自身の性質をキンとの対比、つまり少数派対多数派、貧困対富裕、遅れている対発展しているなどと認識し、相互作用的なアイデンティティであるとする。そして福島原発事故後にニントゥアン省で持ち上がった日本による原発建設計画を挙げ、これは国家のための犠牲のシステムと内なる植民地主義を創り出すと断罪している。

以上のように、チャムとベトナム国家との関係、チャムとキンとの関係、チャム内部の異なるグループ同士の関係、本書評では触れられなかったが正統派ムスリムとメコンデルタのチャム、あるいは正統派ムスリムと中南部のバニとの関係、チャムと中部高原の少数民族との関係、ベトナム内部のチャムとディアスポラ状態にある国外のチャムとの関係など、著者はチャムのエスニックアイデンティティが創造される重層的な場を設定して、歴史の変容とともに分析し、その複雑な諸相を描き切っている。劣った立場、不利な状況に

置かれたチャムの人々に寄り添った視点が一貫している点にも共感した。

さらに、国家の少数民族政策の弊害を、チャムに対する文化政策を例に批判している点が興味深い。少数民族政策に携わるキン幹部たちは、チャムの文化や芸術が市場経済の一端を担い世界的にも人気が出るにつれて、著者が指摘するように当事者のチャムの手から離れて行くことに気づかない。国家の目指す少数民族「文明化」政策をキン幹部は「善意」で遂行しており、自分たちが少数派を搾取してしまっていることに極めて鈍感である。

以下、疑問をいくつか。まず、中南部沿岸とメコンデルタの2つのグループが生まれた経緯に触れていないため、なぜかれらのエスニックアイデンティティが異なることになったのかがわからなかった。まだ解明されていない問題なのかもしれないが、何らかの言及が欲しい。2つ目に、海外のチャムはほとんどがムスリムネットワークに含まれるとのことだが、最初に著者が出会ったチャムのグループは、中南部のチャムが出自の有名な学者に講演を依頼している。かれらは国外に出て、ベトナム国家による「ひとつのチャム」が望ましいとする圧力からも自由なはずだが、なぜ関係の薄い中南部のチャムとわざわざ関係をもとうとするのか。ムスリムとしてのアイデンティティは維持しながら、ムスリムのチャムをチャンパの歴史と結びつけようという試みなのか。「ムスリム」という宗教アイデンティティだけでは足りず、「国をもっていた」という歴史的記憶を必要としているのか。

以下は細かい点だが、「Conclusion」とあるが、内容がニントゥアン省に日本が建設を予定していた原発の話などになっている。原発輸出の問題に関わっていた評者は、著者がこの問題を大きく取り上げたことに感謝したが、コラムのような形で取り上げるのも一案だったのではないか。また、[大川 2017]への言及が無かったが、カンボジアとベトナムの同じメコンデルタのチャムの比較も知りたかったことのひとつである。

以上、メコンデルタのムスリムのチャムを含めて、ベトナム全体のチャムを詳細に分析してそのエスニシティを検討した本書は、ベトナム研究者やチャム研究者だけでなく、エスニシティ研究やムスリムネットワークに関心のある方たちにも広く読まれるべき力作といえよう。

引用文献

大川玲子. 2017. 『チャンパ王国とイスラーム—カンボジアにおける離散民のアイデンティティ』平凡社.

関根康正編. 『ストリート人類学—方法と理論の実践的展開』風響社, 2018年, 768 p.

北嶋泰周*

本書は編者が著書『〈都市的なるもの〉の現在』及び国立民族学博物館の共同研究「ストリートの人類学」で試みてきた議論を、方法と理論の実践的展開として発展させたもの

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

である。序章において編者はストリート人類学の目的が現代を生きる人々に必要とされる「自己限界を生き抜くという根源的な生のあり方に届くような深みを持った真の遊動性に触れた実践知の提供」(p. 22) であるとする。その背景には民衆がホーム中心的な発想でやり過ごせていた状況が不安定化し、ストリートを生き抜く知恵が必要になったことがある。そこで編者が注目するのはヴァルター・ベンヤミンの「敷居」概念であり、編者自身が「ストリート・エッジ」と言い換えるこの場所に、時間と空間の交差の中で実践行為としての創発が生まれるとする。その創発は他者を排除する自己中心的な「ネオリベ的ストリート化」での往路の想像力ではなく、他者の受容によって起こる自己変容、つまり「自己を他者化」する「根源的ストリート化」での復路の想像力によって生まれる。

本書は序章と結章に加えて、起承転結の20章からなる本論と総括討論からなる。以下では各章を概観していく。

〈起〉メジャー・ストリートの暴力と排除に抗して—棄民される人々の中へ

1章においてトム・ギルは、東北地方における原発事故被災者を事例に、支配的な「ふるさと主義」のイデオロギーとそれに対抗するストリートウィズダムの葛藤を報告する。その背景には、放射能汚染による不浄差別と多額の賠償金による妬みの差別という二重のローカリティの意識が存在しながらも新天地に溶け込もうとする人々の姿があった。2章において飯嶋秀治は、児童養護施設内の暴力